「モルフィ公爵夫人」（ジョン・ウェブスター）

モルフィ公爵夫人は若くて美しく裕福な寡婦であつたが、富や身分よりも人間としての價値を尊び、家令のアントニオの高潔に心惹かれて、彼を再婚相手に選びたいと思つてゐた。處が、彼女の二人の兄、樞機卿とファーディナンド公爵は共に强欲かつ横暴で、妹の勝手を許さず、自分達の支配下に置きたいと念じ、ボゾラといふ前科者に夫人の使用人となつてその意中を探れと命じて、意に沿はぬ再婚の阻止を圖る。

だが、公爵夫人とアントニオは互ひに胸の思ひを打明け、秘密裡に結婚して子供を作る。ボゾラは夫人の妊娠を察知して二人の兄に報告する。兄達は激怒し、取分けファーディナンドは妹の不身持を許せぬとて逆上する。その後夫人は更に二人の子供を儲けるが、父親の名は明かさない。ファーディナンドは淫婦呼ばはりをして妹を激しく詰り、自分は結婚してをり「ふしだら女」ではないと抗ふ彼女に自殺を迫る。夫人は脅迫に屈しないが、ボゾラに誑かされて夫の名を打明けて了ふ。樞機卿は夫婦の結婚指輪を取上げ夫婦と家族の追放を命じる。夫人は身の危險を覺えてアントニオと長男を逃亡させるが、自分と二人の子供はファーディナンドに幽

閉される。

幽閉中の夫人にファーディナンドは殘酷な仕打をして、アントニオ達は既に殺されたと思込ませて絶望させ、監禁した部屋の周りに狂人の一團を放つて散々嫌がらせをする。が、「人はもつとも悲慘な逆境に立つときに、眞價を現はすものなのだ」と夫人は昂然と云ひ放ち、「天國へ行けばあんな立派な連れに會へるとわかつてゐるのに、誰が死を恐れたりしよう」と云つて、子供達もろともファーディナンドの手の者に扼殺される。

ボゾラも殺害に加擔してゐたが、彼は夫人の高潔な死の有樣に衝擊を受け、罪滅ぼしにファーディナンドを殺さうとして、過つてアントニオを殺して了ふ。ファーディナンドは妹の死に直面して悔恨の餘り發狂する。樞機卿はボゾラに殺され、最後にボゾラとファーディナンドが刺違へて死ぬ。

この作品の不可解な一點として常に問題視されるのは、樞機卿からさへ「狂つてしまつたのか」と眉を顰められる程の、ファーディナンドの常軌を逸した感情の激發である。妹の結婚は俺の「心臓を憎しみでさし貫いた」と彼は叫ぶが、夫人が何處迄も立派な丈に彼の錯亂振りは尙更際立つ。その理由を彼の近親相姦的欲望に求める有力な說もあるが、それ丈では說明出來

ないと野島秀勝は云ふ。野島によれば、作者ウェブスターが熱心に讀んでゐたモンテーニュの「レイモン・スボンの辯護」に、ファーディナンドの狂氣を「解明する最良の鍵」があつて、そこには「我らの精神の稀有にして熾烈なる動搖から、最もいちじるしき、最も度をはづした狂癖が生じる」との一文があるといふ。卽ちファーディナンドは「時代のカオス」の申し子なのであつて、「中世的なるもの一切が瓦解せんとするところにのみ存在し得る底の人間」だつたといふのである。

錯亂するのは彼一人ではない。悔恨に苦しむボゾラは「あの人が生きてゐる時に、この悔悟の泉はどこに行つてゐたのだ！　ああ、凍てついてゐたのだ」と嘆き、樞機卿も最後に「ああ、わしの良心！　できたら祈りたい。だが惡魔がわしの心を持ち去つてしまつた」と叫ぶ。彼らにしても時代の「稀有にして熾烈なる動搖」の餌食なのだ。ルネッサンスは「理性の時代」の扉を開く反面、「度をはづした狂癖」の闇の世界を發き出した。近代以降久しく顧みられなかつたウェブスター劇が、第二次大戰の慘劇後、急速に復活したのも故無しとしない。（關本まや子譯、エリザベス朝演劇集、筑摩書房）